中野区立歴史民俗資料館だより

第38号

しいのき

オモチャは夢の造形

名誉館長　三　隅　治　雄

「持ち（て）あそび」の訛りモチヤビにオを添え、ビを略した語がオモチャだと申します。もともと「遊ぶ」という行為は、実社会の日常的な生活枠から時間・空間を別の世界に移し、その非日常世界の中で、人々がああもしたい、こうもなりたいと思い描く行動を自在にすることをいい、行楽とか祭礼・芸能・遊戯などがそれに当たります。祭礼などは、神との交歓を願う人々のドリーム（夢）をそれらしく動作で表現した、いうなら「神さまゴッコ」で、古くは「神遊び」と言い、その時用いた祭具がオモチャの原型の一つになりました。たとえば樹木には神霊がやどるとの信仰から、その削り木を手に神のマイムを演じたり、神霊の分与として木片の細工を参詣者に授ける、御神体として祀るなどのことが繰り返されて、次第に多彩な縁起物や人形類のオモチャが生まれました。遊びには、つねに人生かくあれとの夢が込められていて、オモチャはその夢を象徴的に造形化した民俗芸術です。明日を希求する創造精神の脈打つのが、魅力ですね。

文化財よもやま話

七　福　神

ラッキー・セブンといわれるように、“７”は縁起のよい数字とされていたり、物を集めてひとまとめに表す場合に使われたりしています。

福をもたらすとして信仰されていた神霊を室町中期に７人集めたのが、七福神です。出身はインドや中国が中心ですが、その中で、唯一日本における民間信仰の神であるのが、恵比寿です。一般的に、恵比寿・大黒・毘沙門天・弁財天・布袋・福禄寿・寿老人とされていますが、かつては変動もあり、今のように定められたのは江戸時代と言われています。

それぞれの神を見分けるには、持ち物を見ましょう。例えば、漁業・商業、時には農業の神として崇められている恵比寿は、鯛や釣竿を持ち、よく対にされる大黒は台所の神で、米俵・振り鎚や鼠を携えています。また四天王の一人で国家鎮護の軍神である毘沙門天は武具を、唯一の女性神で天女の姿をしている弁財天は音楽を司るので琵琶を持っています。中国の三神で、財運の布袋は杖・団扇・袋を持ち、長寿を司る福禄寿・寿老人は鶴や軸を持っているのが特徴です。

行事には、正月に巡拝し七つ買い揃えた焼き物の福神を船に乗せて、開運を祈る七福神詣が挙げられます。初めて作られたコースは元文２年（１７３７）の谷中ですが、今日都内には１４コースあり、隅田川七福神巡りは、江戸時代の蜀山人・谷文晁による考案と言われています。

また、七福神に扮して口上を述べたり踊る招福の芸能・祭礼や、寺社の縁起物・土産物の郷土玩具にも、福をもたらすものとして登場します。

▲きゃらの市井細工
「七福神」＜岐阜・高山＞

大地に眠る歴史

昔の人は遺跡・遺物をどう見たか

連日の新聞報道などもあり、現代に生きる私たちには、遺跡・遺物について、ある程度の知識・認識をもっています。しかし、昔の人々は、土器や石器など地中から出てきたもの、つまり遺跡についてどのように理解していたのでしょうか。

今回から、この点について調べていきたいと思います。まず、その一回目として、７世紀後半頃の人々が遺跡をどう見ていたかについて考えてみましょう。

ところで、わが国において、地方の歴史や風物をまとめた最古の書物として「風土記」が挙げられます。「風土記」は西暦713年に元明天皇の詔によって全国的に編纂がはじまりました。したがって、この書物に記載されている内容は、すくなくとも７世紀後半から８世紀初頭に生きた人々の間に記憶・記録されていたことを示しているといえます。

その中で現在の茨城県のことを書いた「常陸国風土記」に次のような記載があります。

「平津の駅家の西一二里に岡あり。名を大櫛（おおくし）という。上古に人あり、体きわめて長大に身は丘の上におりて、蜃を採りて食いき。その食える貝、つもりて岡となりき。ときの人大きに朽ちし義をとりて、いま大櫛（おおくし）の岡という。云々。」

これは、現在の茨城県東茨城郡常澄村塩崎にある縄文時代前期の大串貝塚を示す記述と考えられているものです。

当時の人々が、貝が積もって岡になっている所が上古の人、すなわち、かなり昔の人間が食した貝の捨て場の跡（貝塚＝遺跡）であるという的確な認識をもっていることがわかります。

しかし、あまりの貝の量の多さに、当時の人々は、科学的な説明がつかなかったのでしょう。その仕業を巨人という非科学的な存在をもって一気に解説しています。

このことは、1300年前の人々にとって、数千年前の縄文人の痕跡は、自分たちの経験をはるかに超えた、超常現象と感じていたことがわかります。

（つづく）

誌上企画展

暖（だん）

また、今年も寒い季節がやってきます。ところで、私たちが何の気なしで過ごしている中、ふと思い出してみると、今の家と昔の家の暖房がずいぶん様変わりをしていることに気づきます。やがてストーブも見たことのない世代が登場するのも時間の問題でしょう。

今回は誌上企画展と名うち、収蔵資料の中から暖房をテーマにした特集を組んでみました。

炉（ろ）

人類最初の暖房は焚き火です。当初は野外に穴を堀り（炉穴）、そこで焚き火をし、調理場と暖房を兼ねていました。竪穴住居がしっかり立てられるようになった縄文時代早期末（約8000年前）から、炉は室内に設けられるようになりました。炉は、石で囲んだものや、土器を埋めたものなど工夫を凝らしており、５世紀にカマドが導入されるまで、調理場と暖房の主流でした。

炉　（平和の森公園・弥生時代復元住居）

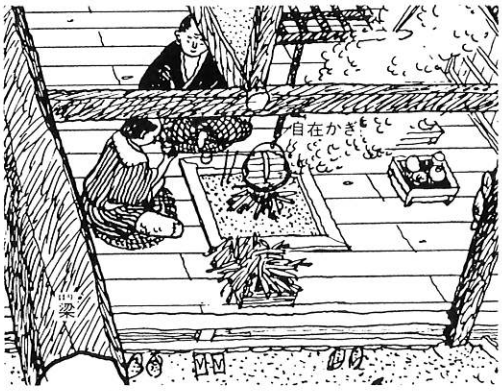
竈（かまど）

かまどは、箱状の構造の中で火を焚く、きわめて熱効率のよい調理兼暖房施設で５世紀に朝鮮半島から導入されました。竪穴住居の一辺の壁面に造りつけられた状態が基本ですが、移動式のものもありました（置きかまど）１０世紀頃に、住居構造が土間と部屋とが分離するようになり、土間に調理場としてかまど、部屋に調理兼暖房施設として炉の子孫である囲炉裏（いろり）が出現します。以来、両者は日本の伝統的施設として定着していきます。

カマド（中野区立歴史民俗資料館常設展示室）

囲炉裏（いろり）

囲炉裏は平安時代頃から一般家屋に設けられるようになります。この頃から土間のカマドは炊飯を主とする調理施設へ、囲炉裏は、惣菜作りを主とする調理兼暖房・照明施設として機能していきます。また、囲炉裏の役割は、そればかりでなく、家族の結束と団欒を示す重要な場所でもありました。それは、囲炉裏を囲んで家長・主婦・家族・客の席次が決定されていることからも示されています。



囲炉裏（『日本人のすまい』彰国社より）

長火鉢

江戸時代は過密都市の大発展した時代です。ゆったりとした間取りが可能な農村と違い、都市部の商家や長屋では、カマドは不可欠な調理施設として設置されましたが、囲炉裏を床に切るというような余裕のあるスペースはなかなかとれませんでした。そこで考えられたのが、囲炉裏機能をコンパクトにまとめ移動可能にした長火鉢です。

長火鉢はケヤキ材を用い、火床になる部分の内側は銅板を貼った構造をしており、側面には引き出しを設けるものもあります。ここには、湿気を嫌うお茶やタバコなどを入れていました。

手をかけて暖まるのが基本ですが、灰が入っている部分に炭を燃料に、中央に五徳を置き、ヤカンをかけて湯茶を沸かしたりします。また、付属品として、猫板と呼ばれる板を脇に置いたりしました。猫板は、火鉢全体が熱いため、その上に急須や茶碗などを置くためのコースターの役割を持つものです。

囲炉裏との大きな違いは、燃料には炎のでる薪（まき）ではなく木炭を用いたことです。このことも都市生活に適したものといえます。

これら長火鉢の発生は、都市の発展による、木炭需要と生産の増加に伴ったもので、江戸時代後期であると考えられています。

火　鉢

火鉢も、囲炉裏機能をコンパクトにして成立したものです。長火鉢と同様にケヤキ材の内側に銅板を貼った方形（角火鉢）のものと、陶磁器製の円筒形（丸火鉢）を基本形にするもの、鉄製のものなどがあります。

暖房具ばかりでなく、座敷の調度・装飾といった役割をもっていました。また、陶磁器製火鉢は熱伝導率がほどよく、手をかけて暖まるのに大変適しており、昭和30年代末期にストーブが急激に普及するまで、どこの家庭でも用いられたものでした。

その他、五徳を置き、その上で湯茶を沸かしたり、鉄網を置いて、餅や目刺しなどを焼いたり、簡易な調理施設としての機能も持ち合わせていました。

長火鉢（大正時代　幅69cm.　奥行38cm　高さ37cm）

火　鉢（大正時代.　幅30cm. 奥行30cm.　高さ21cm）

陶製火鉢（大正時代. 径39cm. 高さ26cm）

炬　燵（こたつ）

囲炉裏から分かれて発達した暖房具に炬燵があります。室町時代に、都市で囲炉裏の上にやぐらを組んで布団をかけて用いたのがはじまりと考えられています。

これが独立して掘炬燵となったのは江戸時代前期からで、炬燵の必要がない夏季には蓋をして床にしていました。また、やぐらの中に瓦質の行火（あんか）や素焼きの火入れを設置して、その中に炭火を入れた、移動式の置炬燵が出現するのは江戸時代中頃です。松尾芭蕉の句に「住つかぬ　旅の心や　置炬燵」というのがあります。

ともに、敷地の少ない都市ならではの工夫といえます。置炬燵は炭の生産量が高まり安価になった明治時代以降には、ほとんどの家庭に普及しましたが、昭和30年代後半には電気炬燵の出現によって姿を消していきました。

置炬燵（昭和初期. 幅40cm. 奥行40cm. 高さ35cm）

行　火（あんか）

行火は置炬燵の一種として発達しましたが、独立して用いることも多かったものです。

瓦質や素焼きの焼き物でできており、この上に直接に布団をかけて、主に足を暖める目的で使われました。小型で火持ちのよいことから、とくに寒い冬の夜、四方から足を伸ばして就寝するといったように、寝具の一部として用いられていました。

俗称で猫行火などと呼ばれています。

行　火（昭和初期. 幅24cm. 奥行24cm. 高さ25cm）

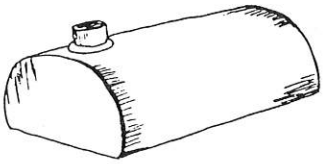
湯湯婆（ゆたんぽ）

湯湯婆も行火と同様に、就寝時に寝床を暖めるために用いられました。室町時代に中国から入ってきたもので、湯湯婆の語源は中国語からきています。婆は母妻のことで、気持ちを暖かくする湯入れという意味があるといわれています。

江戸時代の湯湯婆は銅製で枕に似た形をしており、これに小さな注口がついていたことが「和漢三才図会」に記載されています。

明治時代になると、陶製のものがつくられるようになり、江戸時代の枕形のものを継承した形に加えて色々なものがつくられました。

昭和時代になるとブリキ製の湯湯婆が一般化して、ほとんどの家庭で用いられるように



江戸時代の湯湯婆（『日本史小百科』近藤出版社）

湯湯婆（昭和期. 長さ30cm. 幅20cm）

なりました。楕円形で表面が波状の凸凹になっており、ねじ式の注口をつけたものです。表面の波状の凸凹は強度を増すための工夫です。湯湯婆は熱湯を中に入れて用いますが、ブリキ製の場合は、火傷をする場合があるため、家庭では綿入れなどを材料にして専用の袋を作って、その中に入れて使いました。

ブリキ製の湯湯婆は現在でも製作されていますが、電気アンカや暖房具の発達によって、今その需要はほとんどなくなっています。

太平洋戦争中の湯湯婆は、戦争による鉄資源の収集のため、一時、陶器製になりました。

この時に作られた湯湯婆は、明治時代の形をリバイバルしたものと、ブリキ製の形をそのまま陶器製に置き換えたものとがあります。

ストーブ

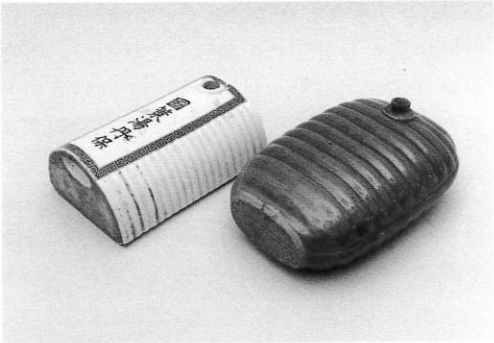
さて、暖房具の中で私たちにもっともなじみの深いものがストーブです。ストーブはヨーロッパで発明・発展したもので、日本では江戸時代に「置暖炉」と呼ばれて、ドイツ製のものが紹介されていました。

普及するのは明治・大正時代で、石炭・薪を燃料として、北海道などの寒冷地や官公庁・学校・病院を中心に使われていました。また、明治30年代にはガスストーブ・明治末年に電気ストーブが輸入されましたが、都市部のごく一部で使われたにすぎませんでした。

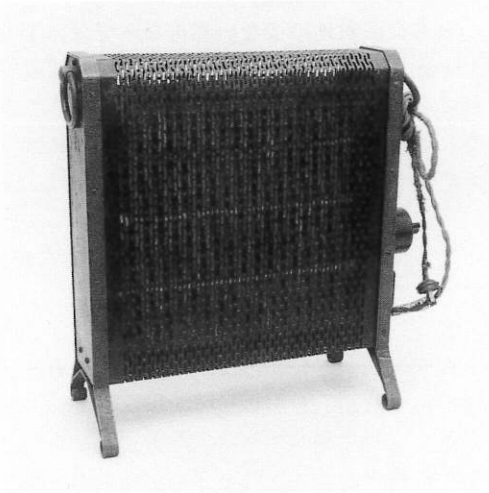
ストーブの一般家庭への普及は、都市の膨張がすすんだ大正末年から昭和初期にかけてのことでした。

東京を例にとると、大正12年（1923）の関東大震災後、罹災者の流入や防災都市計画などによって、郊外の人口が急激に増加しました。そのため、新たに、電気・ガス・水道などの整備がはかられることになり、現在の山の手が形成されるようになったのです。そして、住宅も和洋折衷型の「文化住宅」が広く建てられるようになりました。

暖房器具も、これらの新しい住宅に対応できるように改善されました。とくにストーブは洋間の普及に合わせて、ガス・電気といった新しい熱資源を利用した、移動が簡単な家庭用のものが開発されたのです。



陶製湯湯婆（戦時中 左. 長さ23cm 幅16cm
右. 長さ26cm 幅18cm）



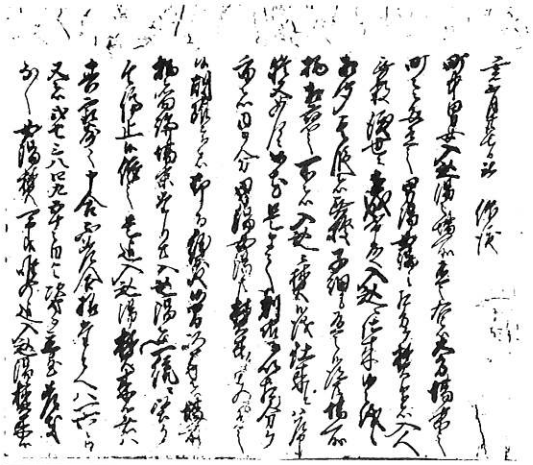
電気ストーブ（大正末～昭和初期
幅42cm. 高さ48cm）

ガスストーブ（昭和36年 幅51cm. 高さ50cm）

古文書つづり

風呂屋の効能

現在、資料館では『堀江家文書』の解読を進めています。そのなかに名主家が伝達され入手した情報を書留めた帳面があり、一節に銭湯の混浴禁止令が載っていて驚きました。



内容は、燃料代節約のため混浴をさせている湯屋があると聞くが、良風美俗によろしくないので今後は日を決めて男湯／女湯に分けろ、といったものです。江戸の町中へは3年前の亥年に触出されていたものが近郊の中野村などへも適用になったことや、これからはそのようにしますという湯屋の誓約もかいてありました。

今のような温湯浴はサウナ形式の蒸風呂に代って江戸時代後期頃から一般化し、江戸の町中には数多くの銭湯が開業して江戸っ子たちの社交場になるとともに情報交換の場としても重要な役割を果しました。銭湯は入浴のためだけでなく、娯楽や集会に不可欠な場所で、風呂敷・浴衣などの文化へも影響を及ぼします。一方で取締る側からは公序良俗を乱すものとみられて規制がなされましたが、火災の危険や水不足の問題により風呂のある家は少なかったので銭湯文化はますます隆盛しました。江戸っ子はそうとう銭湯好きだったようですね。

文書は寛政6(1794)年のもの。虫食いが多い。同年に浮世絵師・東洲斎写楽が登場し140余の作品を発表するが、翌年には忽然と画壇を去った。

中野往来

泉光院増山氏の墓

大和町4－37－15　蓮華寺墓域内

中野区の西端、杉並区との区界に、徳川家ゆかりの蓮華寺があります。「泉光山」と号すこの寺は、万治元年(1658)、本門寺14世日優上人によって開基されたもので、明治41年に、文京区小石川関口台から移転してきました。山門に掲げられている「泉光山」の額は、江戸時代中期の儒家である細井広沢によって書かれたものとして有名です。

ここに泉光院増山氏とその夫七澤作左衛門清宗が葬られています。泉光院は、増山織部某の娘紫で、青木三太郎利長に嫁ぎ、三男二女をもうけました。その後、利長が若くして亡くなったため、子供を連れて七沢作左衛門清宗と再婚しました。ある時浅草寺に参詣に来た、徳川三代将軍家光の乳母春日局に娘の一人が見初められ、大奥に上がりました。その娘はやがて家光の側室「お楽の方」となり、四代将軍綱吉を出産しました。(のちに宝樹院と称す。)そのため母は泉光院と称され、兄弟も母方の増山氏を名乗り、恩恵を被りました。

寺伝によると、お楽の方は出産に悩み諸寺に祈願しましたがその効き目がありませんでした。そんなとき、泉光院が日優上人の大徳なるを聞いて、日優上人に祈願を願い、それにより、お楽の方は家綱を安産することができました。これ以来、お楽の方や泉光院は日優上人に帰依し、蓮華寺を建立したということです。

事　業　報　告

各種事業経過

1999年４月～９月

事業名	内容	期間
企画展	「春季所蔵名品展－堀江家の名画」	4/1～ 6/30
	「吉野ケ里遺跡と中野の弥生遺跡」	5/1～ 8/1
	「夏季所蔵名品展－染付の美」	7/1～ 9/30
	「郷土玩具コレクション展－暮らしと遊びの『こころ』と『かたち』	9/15～11/30
史跡めぐり	「実は寺町・沼袋」　講師：石村篤史（当館専門研究員）	5／8
歴史講座	考古学入門	
	「日本考古学は水戸黄門からはじまった」講師：比田井克仁（当館主任学芸員）	6／5
	「基本用語を知ろう」　講師：比田井克仁（当館主任学芸員）	6／12
	「日本人はどこからきたか」　講師：渡辺丈彦氏（放送大学講師）	6／19
	「森と縄文人」　講師：比田井克仁（当館主任学芸員）	6／26
	「邪馬台国はどこだ」　講師：比田井克仁（当館主任学芸員）	7／3
	「古墳の謎」　講師：比田井克仁（当館主任学芸員）	7／10
	「古代寺院と瓦のはなし」　講師：比田井克仁（当館主任学芸員）	7／17
	「古都発掘」　講師：石井則孝氏（前東京都埋蔵文化財センター所長）	7／24
古文書講座	入門コース　講師：笠原　綾氏（NHK学園講師）	9/4～10/23
	講師：太田尚宏氏（東京学芸大学講師）	「毎週土曜8回」
文化財調査	青梅街道地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財調査	若宮三丁目都営住宅試掘調査	4／1～2
	江原二丁目民有地立会調査	4／16
	沼袋四丁目民有地立会調査	4／30
	本町六丁目民有地立会調査	5／11
	本町二丁目道路公団所有地試掘調査	5／11～13
	沼袋一丁目民有地立会調査	6／20
	新井三丁目民有地試掘調査	6／25
	江古田三丁目厚生省所有地試掘調査	7／8～9
	江原二丁目17番民有地試掘調査	7／29
	江原二丁目31番民有地試掘調査	7／29
	江原二丁目20番民有地立会調査	8／18
	中野六丁目民有地立会調査	8／28
その他	博物館実習：７大学７名	7／27～8/8
	郷土学習相談室	8／24～8/26

入館状況

1999年３月～８月（延　１２６　日間）（人）

一般	社教団体	学校教育	合計
13,846	143	1,188	15,177

発行年月日　1999年10月1日
編集・発行　山崎記念 中野区立歴史民俗資料館
〒165-0022　東京都中野区江古田 4－3－4
☎03（3319）9221 FAX03（3319）9119
（印刷物登録番号　11中教社第５号）